

---

# ESP 魔術師

蒼際

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ESP 魔術師

### 【Nコード】

N 6 6 4 1 A

### 【作者名】

蒼際

### 【あらすじ】

物を引き寄せる能力・アポーション>アポートくを持つ下級魔術師の浅見悠里が水月学園に入学して、数ヶ月経った。

## 1話 水月学園

水月学園と呼ばれている高校の生徒玄関の方にある自動販売機の前に一人の詰め襟シャツに紺色のブレザーを羽織った男子生徒が居た。

俺の片手が自販機前で迷っていた。起床してから学校にたどり着くまでに、眠気が取れなかった。眠気覚ましに缶コーヒーのブラックでも買おうかと思ったが、休日明け、全ての飲料水の値段が20円ほど値上げしていたのだ。

休み前までが110円だったから、今は130円だ。缶コーヒーがここまで高くていいのか？普通は缶コーヒー以外の飲料水だけが値上げするモノじゃないのか？

俺の缶コーヒーに対するポリシーは無糖だ。ただ単に牛乳が嫌いなだけなのだが、この際関係ない……忘れておこう。

ボスのブラックカレターオールドの絶対無糖のどちらにすべきだろうか？まあ、味には大差なのだけれど、気分の問題だ。よし、決めた。

スイッチを押した。膝を屈めて取り出し口から缶コーヒーを取り上げた。レターオールドの絶対無糖を購入した。

理由はあるといえばあるが、ないといえばなかった。やっぱり、缶コーヒーの缶の色だろうな。茶色よりはまだ黒の方が好きだ。

プルタブを押し上げた。ぷしゅうう、と圧縮された空気の抜ける音がした。この匂いがまた格別だ。

ぐいっと缶コーヒーに口を当てて、コーヒーを喉に流し込んでいく。冷たいが苦い。これがまた格別だ。眠気が殺される。ああ、眠気が覚めて、すこしはマシになった。130円で殺される眠気……なんて贅沢な奴なんだ。

「やあ、ユーリよ。中々どうして、朝は早いのだな」

生徒玄関の下駄箱の方からやってきた下関国光くしものせきくに

みつぐが、俺に話しかけてきた。俺の本名は浅見悠里>あさみゆうり<で、ユーリは誰かが訛って俺の名前を呼んだ事が由来だと思っている。全く、どのどいつが俺の名前を訛らせたんだ。

「……お前の日本語すこしおかしくないか？国光」

「中々どうして、言ってくれるじゃないか。いやいや、指摘はおおいに結構だよ。ただ、俺の話を最後まで聞いてくれたらの話だな」またか。国光が何か企んでいるような喋りをする時は、大体写真の話だ。それも撮影対象とか撮影体験談とかの話。

俺はため息を吐いた。そして、片手で頭を軽く掻きながら、缶コ―ヒーを喉にすこし流し込む。

「聞かなきゃ後で五月蠅いから、聞いといてやるよ」

「素晴らしき返答だ。では、まずは今回の被写体についてだが」

国光が喋ってる途中、下駄箱の方から聞こえた声が、国光の言葉を遮った。

「おはよ！」

明るい声だった。線の細い声。俺から見て、国光のやや右後方から同じ学校の紺色のブレザー型の制服を着た長い黒髪をストレートに背中に下ろした少女。青空加奈>あおぞら<なくって名前の女子生徒で、高校1年生。同級生だ。ついでに隣の席に座っている奴だ。さらについて言えば、黙ってればかなりイケてる女子生徒の一人だ。美人で色白。

6メートルくらいの距離から駆けてきた加奈は、すこし乱れた黒髪を片手で撫でて整える。それでやっと話し出す。

「すこし寝坊して、すっごい焦ったよ」

あははは、と苦笑しながら加奈は言った。それに続くように、今度は国光が喋る。

「これくらいは寝坊の内に入らんさ！人間、やはりマイペースが一番だ。周りを気にするな。流されるな。幾人モノ他者の偏見な眼差しを向けられようと、それに屈さぬのがジャーナリストの信念なんだ！」

あーあ、また馬鹿な事を言い出し始めた。俺は首を左右にすこし振った。

「ただの自己中心じゃないか。大体な、お前らもうすこし早く起きた方が良くぞ？もう8時だぞ」

「几帳面過ぎるな。ユーリよ、君にパパラッチの称号を与えたと思うぞ！」

「ふざけんな」

こつん、と俺は缶コーヒーの底の部分で、軽く国光の頭を小突いた。一旦止めていた言葉の続きを言う。

「パパラッチは国光にピッタリだろうが」

「確かに、国光君に似合いそうな称号ね」

加奈は片手の手首に唇をキスさせるように、すこし笑いながら言った。俺がそう言ったら、国光はすこしダメージを受けたように、一歩だけ後ろに後ずさった。こいつには、パパラッチがお似合いだ。「ふふふ、今のは大分効いたぞ……確かに、俺にはパパラッチがお似合いだ。ならば、これからはゲリラ的に撮影を行うとしようではないか！」

と国光はそう言って、俺に背中を向けた。

「では、また逢おうぞ！？ユーリよ。俺のゲリラ的撮影を後日、最初にユーリに結果を報告してたもうぞ！さらばだ」

そう言い残して、すごい勢いで階段を駆け上がっていった。その瞬間、俺はすこし後悔したような気がした。何だか、エンジンに火を点火したみたいな感じた。

ワイワイキヤーキヤー、という喧騒の中、3階の方から俺のところまで「下関！何だその違法紛いなカメラは！？」という生徒指導担当の桜坂教諭の怒鳴り声が聞こえてきた。どんなカメラなのかはすこし興味があるが、

放課後は指導されるな。

と俺は国光の運命を予想した。簡単な結末だから、安易に想像出来てしまっただけなのだがな。そうこう思ってる内に、缶コーヒーの

中身が空になってしまった。……随分と容量のないコーヒーだな、おい。

自然に眉根が寄った。缶を潰そうと握力を強めたが、スチール缶なので、これがどうにも潰れない。へこみさえしない。ただ、単に握力を強めている手が震えるだけだ。

と、突然、加奈が横から片手を伸ばして、缶コーヒーの飲み口を指で挟み取り上げられた。そして、缶コーヒーの缶を回転させて、側面に貼られていた何かの応募シールを剥がしながら、

「これ、もらうね」

「このシール集めてんのか？」

「そう。この応募シールを後10枚集めないと、B商品のCD & M Dコンポ+ポータブルDVDに応募出来ないのよ。はい」

そう言っ、て、応募シールを剥がし終えた缶コーヒーを俺に押し返してきた。俺は何となく缶コーヒーを受け取る。

「随分と豪華だな」

「でしょでしょ！我ながらすっごい発見だよ」

随分と浮かれている様子の加奈はとても明るい笑顔だ。

でも、応募はハッキリ言っ、て当たる確立が少ない。本気で当たるとは期待してないはずだが、このまま今日一日中この調子だとかなりうざいので、釘を打つことにした。

「当たらないだろ。アホ」

加奈の笑顔がカチン、と固まった。

「アホ？私が？」

「そうだ」

「……ユーリ？アホっ、て言っ、た方がアホなんだぞ？」

固まった笑顔のまま、すこし怒りが混じった、ゆっくりとした速度で発音してきた。その言い方が、すっごいむかつく。

「お前、俺に喧嘩売っ、てんのか？」

「喧嘩の押し売り販売する訳ないでしょ？」

……とてつもなくむかついた。すこし俺と加奈の眉根が動いた。

固まった笑顔の加奈と面倒そうな顔の俺達の睨み合い、というよりも見つめ合いの方が近かった。重苦しい雰囲気周りの大気に広がっていき、最後には、ハハハハ……、なんて静かな笑いが漏れ始める。

二人は思った。

すごいむかつく奴。  
。

## 2話 バンド部

/ 1

例えば、昼下がりの屋上を思い浮かべてみる。

空色の空には、疎らに白い雲が浮かんでいて、何だか涼しげな空模様。

屋上のフェンスの端に置かれていた植木鉢を見る。何も入っていない植木鉢は酷く乾燥していた。俺は右手を植木鉢に重ねるように翳して、握力を右手にすこしずつ加えて、持つイメージを思い浮かべる。

ゴトツ、と乾いた音が聞こえる。すこしずつ上昇していく植木鉢、植木鉢の動きに合わせるように右手をすこしずつ上に挙げていく。見えない重荷を指先で感じながら、すこしずつ、すこしずつ上げていき、最後には握力を最大にする。

ぐつ、と右手を握り締めて、そのまま右手を後ろに引っ張った。すると、植木鉢は引っ張った方角に、速い速度で飛んでいった。植木鉢が視線の横を通り過ぎて、後ろのフェンスに激突、そのまま失速した植木鉢は屋上のアスファルトの地面に落下して割れる。

これが、魔術とは関係ないESP 俗に言う超能力だ。アポーンティションとも呼ばれている物を引き寄せる力で、一般的な呼び名はアポートで、多分アポートの方が親しみがあるだろう。これは、魔術とは全くの無関係だ。この力がある性か、俺は魔術師としては三流らしい。魔術師がそんなチャチな能力を得た性で、誇りだとか信念や規律が乱れるから、が魔術師の世界での一般論。

別に好きで得た力じゃねえっての。ついでに、俺の属している魔術の世界では、ランクが四つに別れている。

下級・中級・上級・最上級の内、俺は下級に属されてるみたいだ。



面汚し、という理由なので、公式データではない。ランクが中級以上になると、魔術師は己の魔術をより高めようと考えるようになってくる。

方法としては二つある。

一つ、神話上の生き物が悪魔と天使と代価を支払って契約する。  
一つ、人間の魂と生き血を100人分食らう事。妥協は一切してはならない。

最後の一つは、現代社会の法律に違反しまくりである。

青空を見上げていると、屋上のドアが開いた。

キイイイ、とドアの取付金具が擦れる音、開かれたドアの向こうには、黒いタイトスカートにスーツの上から白衣を羽織った大人の女性の姿があった。ライトブラウンのショートなボブカットに包まれているおおらかな美貌。保健体育教諭の浅葱鏡花>あさぎきょうかくである。

鏡花教諭の視線が、悠里を捉える。

「あらゝこんな暑い日にゝ日なたごっこ？」

遅い、と言いたくなるようなゆっくりとした喋り。こんな真夏のような空の下で、誰がそんな自殺行為な遊びをするか。

とりあえず、否定はしておこう。

「小学生でもそんな遊びしないでしょ。ただ単に授業をサボっただけっす」

「サボりですかゝいいですねゝわたしもゝがくせいじだいによくゝやりましたゝ」

ゆっくりと喋りながら、鏡花教諭は白衣のポケットの中に片手を突っ込んで、キンキンに冷えたレモンティーの缶をなぜか二缶取り出した。そして、ゆっくりとフェンスに向かって歩きながら、レモンティーの一缶を俺に放り渡してきた。

「さきほどゝばいてんのゝおばさんからゝもらいましたゝ」

と言いながら俺の方に顔だけ振り向いた。柔らかな笑顔であった。

これでも飲んだら、という解釈で良いのだろうか？鏡花教諭はレモンティーの缶のプルタブを押し上げた。プシューと空気の抜ける音。俺も彼女と同じ動作で缶を開けて、そのままレモンティーの甘ったるい液体を喉に流し込む。想像以上に冷たかった。

よく見ると、鏡花教諭は童顔だ。

鏡花教諭は空を見上げる。

疎らに広がった白い雲がやや南西に流れている。太陽は一部の分厚い雲に隠れている感じた。空はギリギリ、直視出来るくらいの明るさだ。

「くも〜ほんとうに〜じゅう〜ですね〜」

唐突に、鏡花教諭がそんな事を言い出し始めた。

「さいきん〜バンド部〜がんばって〜ますよ〜。あさみ〜くんも〜にゆうぶ〜しませんか〜？たのしい〜ですよ〜」

突然勧誘か？そもそも、バンド部なんて部活動があつたのか？

俺はすこし臉を閉じて思案した。全く意味のない思案だ。

答えは最初から決まっている。ただ、即答するのが忍びないと思っただけだ。

「俺は部活には向いてないですよ。それに、楽器は演奏出来ないし」「またまた〜じょうだんを〜あおぞら〜さんが〜いつてましたよ〜？あさみ〜くんは〜ざつように〜向いている〜と〜」

あいつ、朝の仕返しのつもりか？それにしても、雑用に向いているって真顔で言うこの人もなんだろうな。優しそうに見えて、意外と性格は意地悪なのか？とても苛立つてくる……間接的に仕返する方法を考えなければ。

「あ〜そういえば〜こんしゅうの〜もくようびの〜ほうかごに〜もぎれんしゅうがあるんですよ〜」

「それで？」

「きやくに〜なってもらいたいのです〜」

「客？見物人って事？」

この人の言葉はどうも、平仮名が多くて聴き取り難い。今週の木

曜日って事は……三日後か。というか、あいつはバンド部の部員だったのか。だが、あいつは何を担当しているんだ？ベースか？ドラムか？それともボーカルか？……どちらにしても意外だな。

鏡花教諭はレモンティーをすこし喉に流し込んで、一息ついた。

「そうですゝかならずゝみにきてくださいねゝじゃないとゝりゅうねんしょぶんですからゝ」

俺はちよつと呆けた。この人は今何と言った？見に来なければ留年処分と言ったのか？それって、すこし教師の権利を行使し過ぎじゃないのか。というか、俺の都合は最初から無視だったのか！？頭痛をすこし覚えてしまった。断ったら留年確定……答えが酷く断定されるな。

言葉に詰まる俺は、ため息をついた。

「……見物に行きます……留年はしたくないので」

と答えると、鏡花教諭はまた柔らかな笑顔を表情に浮かべる。

「ありがとうございますゝ。でもゝなんでゝみんなゝわたしをみたらゝにげていくのでしょうか？」

「気付かないのか？」

「まったくしつれいゝしますゝ」

俺はまたさらに頭痛を覚えた。この人は全く自覚していないのだ。そんな脅迫染みた宣伝を聞かされたら、誰だって逃げたくなるよ。いや、逃げる以前に近寄らないか。終始笑顔の鏡花教諭に対して、俺は随分と疲れた表情をしていた。

俺、この人苦手だ……

。

### 3話 2種類のゲリラ部

/ 2

何もないまま、水曜日になった。

体育の時間。体育館内でのドッジボール大会が開催されていた。黄色い球体が、白線テープでコート分けされた場所を飛び交って、誰かの腹部や胸部、脚部から腕部のどこかに命中していた。運が悪い奴は顔面に直撃して、軽い脳震盪を起こしている奴も居る。ちなみに、顔面セーフというルールの下でやっているの、顔面に命中した奴は不運な事に、退場出来ないようだ。

ちなみに、俺はドッジボールには参加しない。見学だ。だが、決して仮病ではなく、ちゃんとした理由があつての見学だ。

俺は、左目の視力が無い。だから、左からボールが飛んで来ても、何も見えないのだ。他人と平等ではない。

隅っこの体育教官室のドアの横の壁に背中を預けて立っていると、ジャージ姿の国光がやってきた。片手にはなぜかカメラの入ったアタッシュケースを提げている。

よく持ち込めたモノだ。

「国光、お前はもうすこしカメラから離れた方が良くないか？」

「何を言ってるのだ。それでは女子の体育着姿がレンズに納められないではないか？」

「お前は変態なのか、それとも盗撮マニアなのか、立場をハッキリさせてくれ」

この場合は、変態だよな。

そうこう言ってる間にも、国光は手馴れた素早い動作で、アタッシュケースから一眼レフのカメラと望遠レンズを取り出して、組み

立てていく。その間、6秒。カメラは手ブレや日光の反射などを無視するという、嘘っぽい高性能な代物だったと、前に国光から聞かされた。アタッシューケース内をよく見たら、なぜかノートパソコンと小型のスピーカーが入っていた。

俺はとりあえず、それらを指摘する。

「おい、カメラはもう見飽きたが、そのノートパソコンとスピーカーは何だ？」

さらによく見たら、パソコンはソニーの最新機種だった。確か25万はしてたと思う。

「これかね？俺の用意した布石はすべてで三つだ。一つは更衣室、一つはシャワー室、一つはプールの水中だ」

何やら静かな自信に満ち溢れた国光の喋り。

ん？すこし待てよ。更衣室、シャワー室、プールの水中……女子は確か東屋上にあるプールだったな。

悪い予感がした。

ということは、三つの布石はカメラだよな？このパソコンはそれら进行操作するための。

「まさかとは思うが、これはすべて盗撮機械か？」

「盗撮機械とは人聞きの悪い」

「はは、そうだよな」

「遠隔操作撮影機材と言ってほしいな」

「盗撮機械じゃねえかよ！」

「ふふ、ユーリよ、お前は何か勘違いしてないか？この世は所詮、男と女の二人しか存在せんのだよ。然るにだ、我々は女子の裸体を捉えて、この世の男達に伝えねばならぬのだよ。この素晴らしい理想がわかるか？わからないだろうな、所詮はユーリの頭なんぞ、五ミリ程度の厚みしか持たぬ豆腐だからな。それに、この撮影に成功すれば、我らが誇る撮影ゲリラ部の資金はうなぎのぼりだ。

偏った力説をする国光。

俺は「五ミリ程度の厚みしか持たぬ豆腐」の下りから、大分むか

ついていた。別に、俺は撮影ゲリラ部など誇りに思った事はないし、先日までは存在すら知らなかった。国光は俺の左側に腰を下ろす。俺から見たら死角だが、パソコンのキーボードを叩く音で、盗撮を始めたんだな、という事は理解出来る。

何気に、すこしは気になる。

右目の視線をすこしだけ左に逸らす。パソコンの液晶画面には三つの画面に分割されていた。一つは更衣室の天上に設置されたカメラの映す画面、一つはシャワー室の壁に隠蔽されているカメラの映す画面、もう一つはプールの水中カメラ。競泳水着の引き締まった女子の下半身が映っている。俺はすぐに視線を前方のドッジボールの方に逸らす。

と、いきなり横から、バチッ、という電気がスパークしたような音が聞こえた。

すぐに横を見たら、白煙を噴き上げているパソコンの姿があった。国光はやられた、と言わんばかりに舌打ちをする。

「何だ？どうかしたのか」

俺がそう訊くと、

「この校内で、誰かが強力な電磁波を放出したらしい。こんな事をする奴は、我らが撮影ゲリラ部に敵対する治安ゲリラ部の連中に違いない！彼らには、断固たる鉄槌を与えねば！！」

そう汗を漲らせて言うのと、どっかに駆け去って行った。もの凄い速力だ、陸上の選手にも匹敵しそうだ。

そういえば、そんな部活もあったな。治安ゲリラ部……本当のりヴォルバー拳銃と実弾を校内で発砲して、数ヶ月活動停止してたような記憶がある。どこからそんな危ないモノを売買してきたんだろうな。

しばらく、俺はそんなどうでもいい思考をしながら、白熱しているドッジボールの試合を観戦していた。

あつ、相打ちした。



3話 2種類のゲリラ部（後書き）

あと2話



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6641a/>

---

E S P 魔術師

2011年1月12日20時36分発行